

第2回門真市魅力ある教育づくり審議会

(第1回子どもの学ぶ意欲向上部会) 議事録

開催日時 平成29年1月17日(火) 午後2時40分

開催場所 市役所本館2階 第7会議室

出席者 新谷龍太郎、片山仁、川村早余子、上甲尚、中川智広

事務局 満永学校教育部長、八木学校教育部総括参事、西岡教育総務課長、
杉井学校教育課参事、向井学校教育課課長補佐、永田教育総務課主査

傍聴者 なし

議事

新谷部会長

では、子どもの学ぶ意欲向上部会を開会させていただきます。まず、自己紹介からさせていただきます。まず、私ですけれど、平安女学院大学短期大学部の保育科で特任助教をしております、新谷と申します。よろしくお願いいたします。

片山委員

市民委員の片山です。どうぞよろしくお願いいたします。

中川委員

第五中学校で首席、基本的には、教務関係や進路関係を担当させていただいています、中川と申します。よろしくお願いいたします。

川村委員

市民委員の川村です。よろしくお願いいたします。

上甲委員

門真はすはな中学校校長の上甲と申します。よろしくお願いいたします。

新谷部会長

では、できるだけ活発な意見を交わしていければと思っています。まず事務局から、今回の議題についてご説明いただければと思いますので、よろしくお願いいたします。

案件 1. 副部会長の選出

事務局（西岡教育総務課長）

それでは、まずはじめに、前回の審議会で決めることができなかった副部会長、ここの部会の副部会長を選出していただきたいと思います。選出について、よろしくお願いいたします。

新谷部会長

事務局の方で、何か案があればお願いします。

事務局（西岡教育総務課長）

事務局といたしましては、学校長の代表でいらっしゃいます、上甲校長がよろしいのではないかと考えておりますが、いかがでしょうか。

新谷部会長

よろしいでしょうか。

全委員

[異議なし]

新谷部会長

はい。では、よろしくお願いいたします。

次に、先程説明がありました開発的生徒指導の推進ということですが、もう一度事務局の方からご説明いただけますでしょうか。

案件 2. 「開発的生徒指導の推進」について

事務局（西岡教育総務課長）

はい、それでは、お手元にごございます教育振興基本計画でご説明させていただきます。16 ページをご覧くださいませでしょうか。

このページには、本市小中学校の問題行動の現状と課題が記載されております。その課題を解決する方法の一つとして、先程ご説明いたしました、門真市開発的生徒指導を基本とした生徒指導を進めていこうとしております。

続きまして、資料2の門真市魅力ある教育づくり審議会の今後の流れですけれども、今回の部会では、全ての児童生徒が自己実現を達成するための自己肯定感を高めるための生徒指導と、受容と共感で結ばれる人間関係づくりについて議論していただきたいと考えております。そのための討議の柱といたしまして、まず、自己肯定感は何ぞ必要なのか、大切なのか、を議論していただいて、次に、自己肯定感を高めるための土台は何か、を議論していただいて、最後に結論として、受容と共感で結ばれる人間関係づくりにおいて、重要なことは何かというのを、議論していただきたいと考えております。

この内容を基として、自由に議論していただきたいと考えております。お時間ですけれども、先程、4時10分には集合ということにさせていただいておりますので、その10分前、4時までをめぐりにさせていただきたいと思っております。残りの10分間で意見の集約をお願いしたいと考えておりますので、3時50分くらいまでに、ということになるかと思っておりますので、よろしく願いいたします。以上でございます。

新谷部会長

はい、ありがとうございます。では今2時50分ですので、今、説明のありました議題を基に、議論を進めさせていただきたいと思っております。先程、自己肯定感は何ぞ大切か、自己肯定感を高めるための土台は何か、受容と共感で結ばれる人間関係で大事なことは何か、ということですが、他にも、他に何かこういうことを話しておいたらいいんじゃないかなとか、先程、開発的生徒指導という話がありましたけれども、少しこういう観点もあった方がいいんじゃないかっていうのがあれば、教えていただければと思います。

話が出る中でまた出てくればと思いますが。まず、自己肯定感という言葉の中身がかなり漠然としておりますので、少し、どういうふうに思っているのかということ、一言ずつくらいお話いただいてから、なぜ大切かという議論に移りたいと思います。

私としては、自己肯定感というのは、大阪の方で、池田寛先生という方が、ずっとコミュニティづくりをしていまして、子どもたちの自尊感情が低い、そういうことから高めていかないと学力の土台がつかないということで、私としては納得のいく概念だと思っています。で、自己肯定感ってどういうことかという、3つぐらい段階があるのかなと思います。一つは、何かしらこう自分の決めた目標が達成できたというような、やればできるという気持ちであった

りとか、目標には届かないけれども、目標に向かって努力することができるっていうその行動、やろうと思ったら自分はこれができるんだと。で、多分一番ベーシックにあるのが、うまくいかないしやる気も起こらないけれども、とにかく、教室にいてだけでいいとか、生きているだけでいいというか、存在自体を承認できるっていう、そういうふうな感情が、自己肯定感の中に含まれるのかなと思っています。

どういうふうな感じを持たれますでしょうか。自己肯定感について。

片山委員

私もちょっと漠然としているのですが、自分の居場所ですとか、おっしゃるとおり他人から認められるっていうのが、やっぱり一番大きいんじゃないかなと、個人的には思っています。

新谷部会長

ありがとうございます。中川先生いかがでしょう。

中川委員

そうですね。先程、新谷先生が言われた通り、やればできるというようなところであったり、もっと平たく言うと、「自分」を「肯定」だから、自分が好き、自分が好きじゃないと、人も好きになれないってよく言われたりもするので、自分が好きになれるのっているんじゃない？というような感じで受け取ります。

新谷部会長

ありがとうございます。川村さんいかがでしょうか。

川村委員

はい。私は、自分ってやればできるんだとか、ほめてくれてうれしいとか。その土台が、声掛けができる場所であったりとか、肯定感がないで、学習意欲だけじゃなくて、日々の生活態度にもそういうのって関わってくると思います。そういう意味では、開発的生徒指導の推進って言う観点から、自己肯定感を高めるためのっていうところを議論するのであれば、私はあえて、小学校と中学校の先生たちの、自己肯定感のあり方とか、生徒指導のあり方とか、小学校と中学校で、敵対とまでは言いませんけど、「小学校でこんなやつとったから中学校で荒れるんじゃない」とか、「小学校はこんなに手厚くやったのに中学校で荒れさすのは何でやねん」みたいな。ではなくて、義務教育として、小中で連携して、子ども達を9年間で、その子自身の生き方というか将来に向けて

いけるような、そういうところまで議論できるといいなと思います。

新谷部会長

なるほど。小学校と中学校のスタイルとか、子ども観の違いを乗り越えるというか、つなげて。

川村委員

小学校と中学校の先生同士も、うまく繋がりながら、9年間を。やっぱり子ども達も波があって、今、思春期は早まっていると言いますが、そうしたら、小学校からも何か生徒指導って大事なんだと思うし、でも中1ギャップって言われているように、そこを考えると、中学校の生徒指導も大事だと思うし。でもそれって子どもによってきっと、年齢ってすごく幅があるからこそ、小学校と中学校と、同じような認識のもとに、お互いに生徒指導できるような、何ができているのかどうかを含めた議論というか。

新谷部会長

できているのかどうかを含めた議論。

川村委員

門真の将来を思うとね。というような気もします。

新谷部会長

ありがとうございます。上甲先生いかがでしょうか。

上甲副部会長

はい。まあ、もう30年余り、中学校現場で仕事させてもらっていて、生徒指導の担当も長いことやらせてもらいましたけど、どういう子らが荒れるんだろうかと。僕らの思うようにいってくれないのかと思ったときに、やっぱり、学力とか、何をやっても自分はできないっていうのかな、あまりほめられた成功体験がないとかね。家でも、学校でも、あるいは地域でもね。そういう子らがやっぱり荒れていくのかなっていうのは、思います。だからそこをどう学校と家庭と地域が連携して、子ども達に、本当にスモールステップでいいから、俺もできるんだとか、ほめられるとか、認められる体験とか、そういう場面をどれだけ増やしてあげられるかということをやっぱり意識してやらないとだめかなと思います。

僕もかつては、頭から押しえつけるような指導スタイルで教員をずっとやっ

ていましたけど、それがもう通じる時代じゃないなというのは見ていて思います。本当に考え方も多様化しているし、子どもももう全然違うし、今の子どもに合った指導って何だろうと考えた時に、僕も教育委員会で仕事させてもらっていたのですが、問題行動の後追い指導じゃなくって、学校の教育活動全部が、生徒指導だ、というのは、本当に今になって腑に落ちます。20代、30代くらいのときは、こんな言葉もなかったのですが、もう生徒指導イコールやんちゃを指導するみたいなね、そういうイメージで僕らもいていました。もうそうじゃないという時代なのかなって思います。自分の学年が荒れた時もあれば、落ち着いてすごくまとまって、本当に子ども達が自信持って進路を切り拓いてやっていった時もあったので、どこに差があったのか振り返ってみて、やっぱりこう、子どもらが生き生きとね、簡単に言えば学校に居場所があって、授業の中でも、助け合ったりとか、認められる場面があって、色んな自分を出せる活動が学校の中にあって、親御さんと学校の関係も良くて、みたいな。そういう時は、やっぱり、集団としてもよかったんじゃないかと思います。逆に、荒れていた学年は、それができていなかったりとか、学校、子ども達が荒れると、これやってもどうせこの子らちゃんとせえへんからもうやめとこうや、みたいな感じでね、取組が後退する時があるのですよ。そうなると余計マイナスですね。それを考えた時に、本当にどうやっていったらいいのかなってというのは、簡単に言うとやっぱり信頼関係で結ばれるっていうのが大事だろうし、信頼関係で結ばれることによって、子ども達が自信をつけていろんなことをやるのだろうし、そういう場面を極力、学校の中で意識的に作ってあげることが大事かなっていうふうに思います。ちょっとまとまった答えになってないですけど。

新谷部会長

ありがとうございます。どちらかというところ、今のお話、私たちが話した内容ってというのは、2番3番のところはかなり関わってきていて、もう、自己肯定感がなぜ大切かっていうのはかなり自明のようなところがあると思います。

これは九州の炭鉱街で、金川というところがあるのですが、自己肯定感が大事だということで、幼小をつなげて改革をやってきたのですが、なんか、変な自信を持ちすぎて、何というか、小学校3・4年生くらいで学力的につまずくっていう調査もありましたので、単に高めるだけでもいけないのかなっていうので、その高める先に何があるのかというと、失敗を受け止められるような気持ちであつたりとか、仲間のいいところを認めてあげられるような、そういうふうな仕向け方も大事なのかなと。単にできるできるという子いい子だけではないというふうなところは必要なのかなと思います。

今回、小学校の先生がいらっしゃらないので、どういうふうな教育をされているのかっていうのは分からないのですが、実際に小中連携をされている中で、意見の違いとか、ここは難しいなっていうのはあるのですか。

中川委員

正直なところ、私も教師になって、十何年になって、なった時には、今、川村さんがおっしゃったように、そんなことを言っている先輩も中にはいらっしゃいました。正直ね。

けど、今は、どちらかというところ、私たちが言うのは「しんどい」という表現をするのですが、しんどい子たちが多い時は、小学校のときからやっぱりなんかしんどくて、私たちも見学に行かせてもらったりする中で、どうしていこう、この子たちを中学校で預かる時に、じゃあ、どうしていけば、中学校ってどうしても、最後に、進路実現といいますか、義務教育が終わって、ほぼほぼが高校生になることが多いですが、社会に出していく、進路選択が迫られていますので、この子たちをどうしていこうという中で、小学校の先生とも、意見交換をさせてもらったり、中学校でこんなんやっていると、じゃあ小学校からやっていこうかっていうようなことがあったりもします。もしかしたら川村さんが感じているようなこともあるかもしれませんが、今、現場では、いろいろ話をされていたり、小学校の先生から「小学校で何やっといたらいいのかわかるとして先生」と言われることもありましたが、逆に、中学校ではここを大切にしているんだとかいうような交流もさせていただいたので、意外と、進んでいる、とまではいえないところもありますけれども、結構、校区校区で意見交換もさせてもらっているかなと思うんですが。

新谷部会長

自分自身の体験とかを振り返ると、川村さんのおっしゃったように多分、自己肯定感にはかなりムラがあって、特に中1ギャップの話で、中学校に入る時ぐらいから男の子の中での競争意識がかなりシビアになってくると思うんですね。青少年の方の、ニートとかそういうのとも関わるのですが、やっぱり中学校時代のそこで、負け意識というか、自分はできないという気持ちがかかなり強まることで、もう社会に出ていけなくなるっていうのがあると思うのですが。男の子の関わり方と女の子の関わり方もまた変わってくるのかなっていう、実際に中学生の、特に1・2年生、1年生から2年生の夏休みの前あたりですかね、変化で気をつけなきゃいけないこととか、そこにむけて小学校でどういうことをやっておけばいいのかなっていうことを、何かこう、経験から思いつくことってありますでしょうか。保護者の方の子育て体験からも聞かせてもらい

たいのですが。

上甲副部長

かつて、小学校は二つ三つから一つの中学校にあがってくるので、縄張り争いみたいなことが昔はあったんですよ。自分らの小学校出身でグループを組んで、敵対したりとか、女の子なんかでもありましたけど、最近どうでしょうね。そのへんはあんまり顕著じゃないような気がします。僕の経験している学校だけのことかもしれませんけど。いわゆる昔でいえば、この子が学年を仕切りそうやなとかね、あんまり言い方はよくないかもしれませんが、いわゆる番長とかね。そういう仕切る子がはっきり分かりました。今、ほとんどいないです。そういう子は。みんな同じような感じで。見た感じ差はないし、みんなあんまり自分を出ないようにして、うまく付き合うみたいなね。まあ、トラブルはいっぱいありますけどね。そんな感じなのかなって思うように思います。

で、今、川村さんと中川先生がおっしゃったように、小中連携はもう今ずいぶん進んでいます。僕が教師になった頃は、小学校6年のときの担任と、中1で持つ先生が年1回くらい打合せするくらいだったのですが、今はどこの学校も夏休みぐらいに集まって、小中合同研修っていうのもやっているし、それ以外にも、生徒指導の担当だけで別に集まりを作っている校区もあるしね。ずいぶん進んでいると思います。小学校でやっている指導と中学校でなるべく段差が少なくなるように結構連携は進んできているじゃないかなと思います。お互いの授業を見に行ったりとかね。かつてはあんまりそんなこともなかったのですよ。お互いに研究授業を見に行ったりとか、オープンスクールを見に行ったりとか。案内をお互いに交換して、割と状況把握をしています。

あと、ちょっとまあ中学校きてしんどくなっている子、小学校の時どうでしたか、みたいな感じで、生徒指導担当と小学校の担任が電話でやりとりしたりとか、そういう場面はすごく増えたと思います。かつてより。まあ、かつては川村さんもおっしゃったように、小学校の先生と中学校の先生がちょっといがみあっていることも確かにありました。ぼくもそれを経験したこともありますけれども、今そんなことはほとんど聞かなくなりました。小学校何してんねんとか、中学校何してんねんみたいな。言っても子どもにとってプラスにならないじゃないですか。そんな不毛な争いはもうやめようみたいな空気は多分どこの校区にもできてきているじゃないかなと。先生たちも若くなっているというのが大きいですね。お互いに若い先生が増えているから、そうしないと、もうやっていけないというのものもあるし、教師のメンバーが入れ替わっているものもあると思います。

新谷部会長

今のお話で、自分の体験で、ある中学校に3年ほど入らせてもらっていたのですが、クラブ活動が結構熱心な学校で、若い先生が4人ぐらい入って、その時学校で力持っていた剣道部の先生で、バリバリ、ビシバシやるような中学校の雰囲気があって、若手の先生がそういったベテランの先生に倣って、形どおり厳しくやるのですが、ほんとに、手のつけられない女の子が入ってきて、指導が全然うまくいかなかった、崩れたみたいなことがあると思います。小学校と中学校の違いはクラブ活動も大きくて、今関わって授業している大学生は、バスケットなんかだと、体罰なんかあって当たり前だという感じで、中学校でのクラブ活動での指導のあり方っていうのをやっぱりある程度見ておかないと、授業では、共感的、開発的生徒指導と言っておきながらクラブでバリバリやってたら、ほんとに裏表があると思うのです。その辺の実態は。中学校でのクラブ活動の指導のあり方は。

上甲副部会長

クラブもね、うちの学校でもクラブを熱心にする先生が多いのですが、土日休まず来て、活発にやっているのかなと思いますけど、ほとんど怒鳴る場面は見たことがないですね。ちょこちょこ練習見に行ったりとか、試合も見に行かせてもらったりとか、学校の中をうろうろしてるんですけど。去年の4月から今の学校に赴任しましたが、先生が生徒を怒鳴っているのを、1回だけかな、見たのは。ほとんどそういう場面はないのですよ。先生が若返ったというのも大きいでしょうし、本当に、子どもと一緒にやるみたいなね。ガンと上からいくのももちろん、必要なときは必要ですけども、そうじゃなくって、一緒にやろうみたいなスタンスでね。うちの学校はですよ。そういうやり方でやってる先生がほとんどちがうかなと思いますけどね。

新谷部会長

ある意味、今回の議題の3番とか2番で、実は変えやすいのはこのクラブ活動のところなんじゃないかなと思っていまして、水泳でも陸上でも、いわゆるコーチングっていうのですが、選手とどう信頼関係を築いて、目標実現に向けて、支援的な態度で関わっていくのか、あくまでプレイするのは選手個人だっていう姿勢って、開発的生徒指導ととても似てる関わり方だと思うのですが、クラブ活動の仕方を、きちんと、こういう方向性の生徒指導の仕方を学ぶと結構日常の生徒指導にも生きてくるのかなと。さっき事例に出した先生もそれで変わっていったっていう感じなのですが。日常の指導の仕方を少し変えるなどで、生徒との関係性がすごく変わっていったということがあると思いま

す。

もう一つはやっぱり、保護者との関係っていうのが難しいのかなと思うのですが。学校で一生懸命できる、できるっていうふうにやっても、家の中で、ガツンとやられたら、という。中川先生、何かありますか？

中川委員

三者懇談で止める側に入ったことが。親御さんがやっぱり、普段なかなか大変だと思うのです。お仕事があったり、子どもとおうちで関わってなくて、懇談の場面で、関わる時間ができた、で、成績であったり提出物であったり、子どもから聞いていることと大分差があったりすると、親御さんの方がヒートアップされるとき、まあまあと。

川村委員

うちです。懇談でケンカしています。聞いていますけど。

中川委員

聞いていても、やっぱりと。

川村委員

腹立つ。私ね、実は、ある研修に行って、東京の方で、自己肯定感を子ども達にアンケートとって何パーセントかって言う資料を、何年か前だったと思うのですが、それをもらってきて、我が子にさせたのです。私、これだけ打ちのめしているから、と思ったら意外と二人とも高くって、良かったのか悪かったのか。ちょっとなんか、どういう意味かなって思い。

中川委員

でもやっぱり、関わっている時間もありますし、そうやって厳しくされる場面と、ずっと厳しいわけじゃないと思いますので。

上甲副部長

伝わっているんじゃないですか。

川村委員

だから、生徒指導も受けるんですよ。

中川委員

やっぱり、伝え方であったり、伝わり方であったり、先程の教育委員会の説明にもあったとおり、色んな子がいるので、こちらの意図したことが子どもに伝わっていないこともあったら、子どもには伝わったけど、保護者に伝わってなくて、家庭訪問なりして、実はこうこうこういうことでしたと説明したら、ああそういうことだったのかっていうこともありましたし、受け取り方ひとつで、全然、結果が違うことになるので

川村委員

先生と親の会話ってすごい大事だと思います。なんかすごい敵対していても、会話することで、「お前の子どもはどうやねん」ってぐらいの、ずっと否定されていると思う親が、先生と話していて、実はそうじゃなくて、自分の子どものことをよく見てくれたんだとか。逆に、親と話して「お前自分の子どもどないしとんねん」って先生は思いながら話をしていたら、実はお父ちゃんもお母ちゃんも一生懸命で、でも本当に育て方が分からなくて、苦しんでいたとか、それが分かった時に、お互いが、一緒に頑張って子どもを見ていきましょとなったときに、子どもってきっと伸びるのかなって思ったら、すごいコミュニケーションって大事だなって。

クラブのことも言っているんですか。クラブの先生は、たぶん若返ってはいるのですが、怒鳴らないっていうより、やる気がないというか、そういう意味ではね。お母さんやお父さんたちに聞いてたら、クラブ、例えば、朝ちよっと集まって試合前とかに練習したいって言ったら、「じゃあ自分らで、生徒何人以上集めてきたらやった。それがあかんかったら無理や」とか言われたり、小学校の子どもがね、同じ校区の中学校のクラブの先生のことをね、私それは衝撃的だったのですが、「何々先生っておるやろ、知ってる?」「知ってるよ」って言ったら、「その先生な、中学校で部活を見てるけど、やる気ないらしいで」とかね。それは子どもから聞いたのです。だからお兄ちゃんなのかお姉ちゃんなのか近所のお兄ちゃんお姉ちゃんなのかそこはわかりませんが、子どもたちの中では決して昔のようなスパルタはされていないけど、だからって、自分たちのことを認めてもらってクラブ活動しているのかっていうときってそうじゃなくて、やる気がないんじゃないのとか。だから先生も、例えば野球部、でも野球をその先生がしていたとは限らない。柔道部なんかは、やっぱり柔道をしていた先生がいないとやっぱり学校自体に柔道部が存在しない。極論を言えばね。そんな感じで、やっていない先生がそのクラブを持つっていうことの大変さもあるのかもしれないですけど。でもだからこそ、指導まで行ききれてないっていうか。せめて思いだけでも子どもにそこで、「俺も初めてやけど一緒にがんばろう」ぐらいの何かがあったら、もっとちがうかもしれない。そう

いう先生もいらっしゃいます。

中川委員

私も今、卓球部の顧問をさせてもらっていて、自分も中高卓球部だったので、分かるので、色々細かいことまで言えますが、それこそ、初めて教師になった時には、バスケット部。で、その時の3年生の副キャプテンに、「ちょっとフリースローのやり方教えて」から始まるし、決まった日に、本屋にいったルールブックを買いに行くところから始まりだから、そんな細かい指導はできないけども、とりあえず一緒にやろうかなくらいの人も多いですよね。今、確かにね。で、なかなかやっぱり、もどかしさというか、子どもらがもし小学校から色々やっていて、色々わかっている子に、あーだこーだ言っても先生わからんくせに言いやがってみたいなのがあっても困るし、で、悩んでいる先生もいるのは確かです。

川村委員

その悩みから、やる気が、子どもと一緒に、先生もやっぱりそういうところでそがれちゃうところはあるのかなとか。

新谷部会長

今、川村さんおっしゃったみたいに、多分、自己肯定感高めるために一番大事なのが、僕の個人的な感情では、先生自身が、まず認められることかなと。本当に子どもを認める余裕がない。結構、先生のゆとりとか、認められ感、大事だと思うのですよね。余裕がない先生ほど、難しい部分がある。やっぱり子どもからしてみると、どういう状況でも受け止められるっていう安心感がまず前提にないといけないかなと思うのですけど。

片山委員

もう今、究極の話をされたと思うのですけど、子どもよりも先生の肯定感を高めないと、子どもに言っても駄目ですし、さっきのクラブ活動の話も然りですけど、先生に、もうちょっと指導をしてほしいという話をしましても、結局子ども達の、生徒の自主性に任せているという話になるのです。一方で、あまり厳しくすると、今度はクラブ活動に来なくなります。幽霊部員になってしまいます。で、結局クラブにも来ずに家に帰っちゃう。そして、ほっておいたら学校にも来なくなる。まさにクラブ活動で人間関係、生徒と先生の関係も築けたらいいのですけど。今、どうですか、クラブ活動に参加している生徒って減ってきていますか。

上甲副部長

減っていますねえ。データとしては分からないですけど。減っている感じはしますね。

片山委員

感じ的には減っていますよね。私の子どもが通っている学校でも、半分くらいの生徒しかクラブ活動に参加していません。じゃあもう結局クラブ活動に参加していない子どもたちっていうのは、もう学校に行っても、本当に授業で接するくらいで、関係を築こうにも築けない。すいません前の話に戻っちゃいますが、その小学校の時の児童の居場所と、中学校になってからの生徒の居場所っていうのは変わってくるのです。小学校といいますのは、私も小学生の娘がいますけども、とにかく、勉強だけじゃなくても、何かにつけて音楽でも体育でも、勉強できない子でも体育でほめる、音楽ができる子はほめる、っていうような話になるのですが、中学校になると、どちらかという、5教科以外の4教科っていうのは、ちょっと無視されかねない。もうとにかく5教科だけ勉強できてればいい、で、勉強するためにクラブ活動に参加しない、で自分の居場所がなくなって結局不登校になる。私が感じている限りでは、昔みたいに、暴力事件が起こるといよりは、不登校で学校は困ってないですか？

中川委員

第五中学校、まさに、先週のPTAの運営委員会の方でも、うちの生徒指導担当が言っていたところなのですけども、そのシフトがね、そういう風な形があって、じゃあどういふ働きかけをすればいいのかっていうのを、保護者の方にも投げかけたり、本校の中の校内研修にも、一つの柱としてこれをしていかなあかんというの、この間の部会で決まっていたところなので、一つの課題ではありますね。

ただ、5教科っていうのもあるのですが、やっぱり、体育祭であったり、文化祭であったり、中学校でもそこで活躍できる場所であったり、各中学校多分、今、冬は長距離をすることが体育の学習内容であると思うのですが、長距離のベストタイムを貼ってあったりとか、学年の掲示版とか。はずはなさんも貼っていましたよね。

川村委員

それね、貼ったり貼らなかつたりっていうか、体育祭でも、順位をつけないんです。うちの中学校は。私、この間、あえて自分で、本部役員なので、自分

で閉会のあいさつの時に、「順位発表します！プログラム何番から何番」「おめでとう！」って。

平等平等っていうけれど、やっぱり、平等ってなんなんって。義務教育でヨシヨシされても、高校から後、中学校から働く子もいるし、社会にでたらそれこそ競争社会にいるのに、競争もさせんとそんなんしてヨシヨシしてて、いいのかなと。そういうところの体験も、負けたからこそ次はみんなで作戦練って、あそこに勝とうやとか、何かそういうところで生まれる人間関係もあると思うのですけど。そういうのもないし。

中川委員

クラブ活動ではそういうことも、しょっちゅうじゃないですけど、この大会に勝つために頑張ろうとかね。

川村委員

そうそう。だからクラブを今言ってみたいに半分くらいの子が入ってないっていうことは、結局そこをどうするかっていったらそういうところでカバーするのかとか、もっとう、子どもに順位をつけてもいいと思うし、学校の教科にしてもね、平等平等で、同じ授業するのが、ほんとにその子にとっていい授業かっていったら私は多分違うと思ってて、少人数で、成績ごとにね。

中川委員

習熟度別というやつですね。

川村委員

うんうん。そこで、その子なりにできる。今、この子は3しかできない、その3しかできない子ども達を集めて、5になる。5できている子は、その子たちを集めて、7できるように。だからどっちもお互いに2ずつ上がるっていう、みんな平等にするのではなくて、みんなが同じように上に上がるステップを、学習の場でもやっていけると、できたやん、解けたやん、がんばったやんって。小学校を見ている、小学校4年生5年生でつまずいたら中学校にまで響くっていいですけど、ほんとに分かってない子っていて、もうまさに、足し算引き算の式がちょっと分からないっていう。そんな子は、もう小学校の時から、40分、45分授業苦痛かなって思ったら、その積み重ねで、自己肯定感がそがれまくる。中学校になったら行きたくないかなってすごく思う。

片山委員

そうですね。それで授業妨害するとか、昔はあったと思います。うちの子どもが通っていた学校でも、しょっちゅう授業中に非常ベルが鳴らされたっていうことがあったと聞いています。今日は何回鳴ったって家に帰ってきたら報告するくらいです。それが今は全然鳴らないらしいのですよ。一方で、そうやって、勉強についていけない、自分の居場所がない子っていうのは、来ないのですよ学校に。

新谷部会長

今話を伺っていると、この自己肯定感の一番喫緊の課題としては不登校のところに結構つながってくるということがキーですね。もう一つ、小学校については、授業で分からないという状況をどうやってなくすのかが、一番大事ですね。今の話では。

あと受容と共感で結ばれる人間関係作りっていうことですが、なかなか先生の関わり方っていうのは今までの話の中で見えてこなかったのですが、特に若い先生とか、そのあたりはどうでしょうか。何かこう学年とか、学校で共通して考えてらっしゃることとかってあるのですか。課題と感じていらっしゃるものがあつたりするのか、保護者の方からこうしてほしいっていう要望があつたりするのかどうですか。

片山委員

特に私が本当によく感じるのが、学校の先生方も今、世代交代が進んでいるのか、ちょっとベテランの、ご年配の先生方が退職されていたりしている中で、30歳前後の、若い先生方が増えてきているのですが、とにかく忙しいのは分かるのですが、子どもに対して無関心、自分のやるべき、やらなければならないことだけに集中していて、あまりこう、興味を持っていないっていう部分がすごく感じられます。何かこちらが提案しても、反応してくれない。まさにこの前の互礼会のお話じゃないですけども、とにかく、校長先生や教頭先生が話をしても、教職員の皆様は何食わぬ顔で、自分のやることだけやっている。あまり言うことを聞いてくれないと。そういう話があつたとおりに感じます。そのあたりがすごい物足りなさを感じる部分でもあるのですが。一方で、じゃあ、保護者、親はどうなのかっていうと、親もまさに否定するわけじゃないのですが、普段からあまり子どもに接していない。考えてもみてください。朝、起きてから、朝ご飯を食べさせて、送り出すまでの時間。30分もあればいいですよね。で、帰ってきてから、それこそ、小学校でも児童クラブ、中学校だったらクラブ活動をして帰ってきてから、ご飯を食べさせて、寝るまでの時間、数時間。それと学校にいる時間と比較すると圧倒的に学校にいる時

間の方が長いです。就寝時間を除けば。それを考えた時に、親の接し方も非常に悪いっていうのがね、もう痛感しています

新谷部会長

今、ぼくには小学校1年生の男の子がいるのですが、幼稚園の時は結構、あったことを話してくれたりしていました。先生のところについても、結構具体的にこんなことできていましたよとか、言ってくれるのですが、小学校1年生になってからあんまり学校のこと話してくれないし、通信簿を見ても、何か今ワープロ打ちなのですね、手書きじゃなくて。学校の中で、どういう風なことしているのかっていうのは、親として多分知りたいと思います。そこで子どものいいところが共有できたら、家でもちょっとなんかこんなところほめられてたでとか、こんなことしていたらいいなっていうふうな話ができるかなと思うのですが、子どものことを見る、記録するっていうのが一番。やっぱり目の前でこう振り回されていたら子どもの様子一人ひとりなんか見る余裕なんかない。子どもの様子をちゃんと一人ひとり見るっていうふうな指導を、上から受けてなかったら、一律でバーンみたいな感じで、やってしまうことも。

中川委員

今、色々な学校が、世代交代っていう形で、実際にいて、各学校で、自発的にといますか、先輩らがいろいろ培った技を、どう継承できるのかっていうのを、自主的な研修の形をとりますけども、含めて、各校で取り組んでいっています。通信もね。うちも、やっぱりワープロ、パソコンが多いです。ベテランの先生が手書きで味のある学級通信を書いておられるのを見て、去年は打っていたけど、今年から手書きに変えたっていう20代前半の先生がいたりとか。やっぱり好評ですね。あれって。私も自分が担任時代は、打っている方が多かったので、あかんかったなあと思いながら、っていうのがあったりとか、あと、うちの中学では、中学校はどうしても授業をしたら、次の授業のクラスに行っという形で、あまり自分のクラスに担任がいるということはないのですが、直接、授業の教室に行かずに自分の担任している教室に一回戻って、ワイワイしている子らと、ちょっと関わって、じゃあ先生も授業行くから、自分らも座りや、みたいなのをしていったりとか。少しでも関係つくるために時間が、会っている時間がいりますので、っていうような形で、結構、自分の教室に、担任が行って。まあ、体育の先生はそれができなくて、くやしがっていたりとか。逆に「いいなあみんなは」みたいなことがあったりとかするので、そういうようなお話も受けつつ、じゃあ何ができるかなっていうのは、若い人なりに、ということなんか僕が年いているみたいですけど、ちょうど真ん中なので、僕

の場合は、それをうまく受け継いでいかないといけないなどある意味プレッシャーを感じながらいるのですけども。

新谷部会長

今の中川先生のお話、誤解されてはいけないのですが、先生の仕事を増やすことが目的の話ではなくって、効率的にすべきところは徹底的にすべきだと思うのです。子どもの様子を、データとして記録するなりなんなりっていうのは、きちんと、できるだけ手間をかけなくてもいい。でも伝え方は、デジタルじゃなくてアナログのほうが、多分、うまく伝わるのだろうなど。何かその辺の、使い分けは多分、ベテランの先生はうまくやるでしょうし、三者面談の中でもいきなり伝えるのではなくて、まず、お母さんのしんどさの共感から入るとか、何かそういう風な技をね、信頼感をつくる技っていうのをね、学んでほしいかなと思うんですけど。

川村委員

すごく最近感じるのは、先生と子どもの間が、小学校でも中学校でも、すくなくあなあなんです。しゃべり方一つ、言葉遣いでも。子ども達が先生のことを先生って呼ばなかったり、先生も新聞でいじめになるような言葉で子どもを呼んでいた。でも、それってあるんやろうなって思ってしまうような、なあなあさがすごくあって、そのなあなあさの指導と、自己肯定感って、結びついたりするのですか。今ふっと思ったのですけど。

新谷部会長

問題は、教室の中で、先生と子どもが1対1、先生が一人だけっていう状況が、教室をプライベートな空間にしてしまうのだと思うのです。もしそこに、もう一人、他の先生がいたら、なあなあにはできないのですよ。その先生の目があるから。で子どもも、なあなあにはなれないと思うのです。もう一つの目があるから。今、北海道のある小学校に入っているんですけど、そこでは、なるべく2人で入るようにしていて、一人が、若い先生が授業進行している中で、ベテランの先生が子どものノートをバーッと見て回るんですね。で、どの子ができているできていないっていうのをその授業の中で把握して、で、そこで授業展開を変えていく。とかいうふうに、これは、なあなあではないけれど、子どもをちゃんと見る、一つの仕方だと思います。なので、基本的にはなあなあとの関係は自己肯定感を高めないのじゃないかなと思いますね。テクニックとしてあるのかもしれないですけど、それよりも子どもがちゃんと見られていると。提出したものを、ここまで見てくれているんだとか。他の人は気づいてな

いけれども、その子のいいところを先生は実は見ていたとか。それこそ、人の掃除してないところをちゃんとしていたとか。なんかそういうふうな。

でもそれって先生一人の目だけでは追い切れないので、色んな先生で多分、話し合いながらそういう話を共有していくのだらうと思いますけど、自己肯定感を高めるためには、たくさん目を持つことが多分、必要なだらうなと思いますね。

上甲副部長

先生と生徒との関係で、なあなあというところかというと、ある子には上の名前前で呼んで、ある子には下の名前と呼ぶとかね、まれにそういうのも。今はあんまりそういうのはないかもしれませんが。

川村委員

まれじゃないと思います。多々あると思います。

上甲副部長

それって公平な目で見てどうなのかなとやっぱり思うし、子どもらも敏感に感じていると思います。扱いがちがうなみたいところで、あの子にはこう、なれなれしいというか、僕にはちゃうな、とかね。そこはやっぱり意識しないといけないと思います。教師として。で、うちの学校でやっているのは、男の子も女の子も、これもう小学校はとっくにやっていると思うのですが、両方とも「さん」付けで呼んでいます。ほとんどの先生が。ぼくらはまだ逆に男の子を「くん」で呼んでしまうのであかんのですけども、その辺は割と統一感があって、子どもによって呼び方を変えたりとかね。男の子と女の子で違ったり、そういうのはしないというのが、うちの学校では統一されてやっている感じで、これはいいなというふうにすごく思いますね。

川村委員

きちんと統一されているのですか。

上甲副部長

なっていますね。ほとんどの先生は。まあ若干数名、呼び捨てにしている先生とか「くん」付けの先生もいるけど。ぼくなんか一番あかんのですけどね。昔のくせが抜けないのですが、その辺はとても統一感がありますね。まだ新しい学校だから、スタートしたときにその辺はきっちり。まだ5年目の学校なので、統一してスタートできたのだと思います。それがいい伝統で続いて

いるのかなという気がしますね。大事な視点だと思います。例えば僕なんかこの年になって、かつて教えた子が40歳くらいになって同窓会なんかで会う機会があるのですが、20代の頃、僕はすごく厳しくやりましたけど、その卒業して40歳くらいになった子らが言うてくれるのは、本気で向き合ってくれたかどうかというところですよ、生らが。それはすごく言っていますね。今、その年齢の子らとたまに会ったり、この前も会ったのですが。本気で叱ってくれたとか。本気で叱られたけど、その後ちゃんと話を聞いてくれたとか。まあ順番は逆やと思うのですが。そういうのは言ってくれますね、その子らはね。まあ、今となっては赤面するような指導の仕方をしてしまっていたんだけど、ここでは言えないような指導をしていましたけど、大人になったらその子ら、特に中学校のときちょっと外れてた子、やんちゃしていた子らほど、割と集まることがあるのですが、その子らそういう風に言ってくれますね。そこがやっぱり、信頼関係っていう部分っていうのかな、本気で向き合っていうのかな、一人も見捨てないで、っていう。

そういう姿勢は、やっぱり子どもら見ているなど。伝わっているなどと思います。さっきの名前の呼び方も含めてね。そこやっぱり、僕らが一番気にしないとあかん、教師としてのスタンスであるかなっていうのを思いますね。

新谷部会長

冒頭の門真市の9年間通じて子どもを見ていくっていうことが大事だ、どうすればいいのか、みたいな話をしていたと思いますけど、この開発的生徒指導の一番の目的は信頼関係の構築と、自尊感情をどう高めるかということなので、9年間かけて、先生とか大人っていうものに対して、信頼していいんだっていう、どういう環境にある子どもでも、大人っていうのは信頼できるんだっていう関係をどう作っていくのかっていうのが多分課題なんだろなって思います。その中で、信頼関係を作る中で、自己肯定感っていうのがまずないとその信頼関係を作ろうっていう土台すらない、できないというふうになるのかなと。

ちょっといろんな話にとびましたので、上から、もう一回どういう話があったのかっていうことを、振り返って、残りの時間を使っていきたいと思います。

まず、自己肯定感について、居場所とか他人から認められるとか、やればできるとか、自分が好き、ほめられてうれしいっていうような、こういうものが自己肯定感の中身だろうと。それは波があったり、中1ギャップっていうところで見られたりすると。小中をつないでこれを高めていくとか、考えていくことが大事だと。で、自己肯定感っていうのは、これまでの学級経営の経験からすると、荒れの問題であったりとか、学力の問題とかっていうのに密接に関わってくるというふうな話がありました。で、小学校と中学校の違いとして、中

学校だったら進路の問題が間近に迫っているのに、小学校とちょっと指導の仕方っていうのを変えざるを得ないっていうところがあると。で、中1ギャップの問題からすると、昔は縄張り争いみたいなことがあったけれども、今は小中連携がかなり取組として進んできているので、怒鳴る場面というのはほとんど、あまりなかったりとかしてるということでした。で、保護者と先生の信頼関係っていうのも、まず、お互いがお互いのことを誤解しているけれども、面談する中で、そういう誤解っていうのが打ち解けて、そこから子どもをどういう風に持っていくのかっていう信頼関係、自己肯定感を高めるための土台っていうのができてくるっていう話があったかなと思います。ただ、先生が、クラブ活動とか、いろんな指導の仕方でする気がないように見える、捉えられてしまうとか、それはやっぱり情報不足であったりとか伝え方の問題っていうのが出てくるのかなと。

で、小学校の時は、5教科以外、色んな4教科も含めて、色んな場面ではほめる場面があるけど、中学校になるとかなり教科が限定されてしまって、そういう居場所づくりとか、居場所であったり、ほめられる場面っていうのが少なくなってくるのではないのか、で、特にそれが不登校の問題にあらわれてきているのではないかっていうことで、例えば学校、授業の問題なんかでも習熟度別のやり方で、どういう段階にあってもそこから伸びたっていうところに着目したような見方っていうのもあっていいと思うし、体育祭文化祭とか、そういうふうないろんなイベントの中で、子どもの活躍するところを見ていく必要もあるだろうと。で、とくに30代前半くらいまでの、先生の指導、対応スキルっていうのですかね、先輩が培った技っていうのを引き継いで行って、保護者と子どもとの信頼関係づくりを進めていく必要があるけれども、信頼関係というのは、端的に言えば本気で向き合うっていうことと長い時間をかけて培っていくことが必要だっていうふうなことが大体の、ざくっとした流れかなと思います。

で、討議の柱として、自己肯定感は何ぞ大切か、それを高めるための土台は何か、受容と共感で結ばれる人間関係づくりにおいて重要なことは何か、ということなのですが、少し、それぞれで答えを、自分なりの答えを考えてもらって、出していただいて、まとめるっていう形で進めたいと思います。5分弱ぐらいで考える時間を持って、自分なりの答えっていうものをちょっと考えてもらいたいと思います。

< 思考時間 >

片山委員

ちょっと余談になっちゃうのですが、小学校の先生、中学校の先生って、

なんていうか、「私は中学校の先生になりたいねん！」とって、なれるものなのですか。

新谷部会長

なれるものだと思います。

片山委員

逆に小学校の先生が、中学校の先生になれないとか。

新谷部会長

いや、今は。

片山委員

なれるのですか。普通に。

上甲副部会長

免許がいりますけど。種類が違うので。

片山委員

ああ、そうなのですか。

中川委員

小・中・高で免許が違うので、持っていればなれますね。

片山委員

その免許を取る時に、こういったスキルを求められるような場面ってあるのでしょうか。先生が。

上甲副部会長

最近の大学どうなんやろ。教師の課程はどうなっているんやろなあ。

中川委員

正直、教育大学だったら、充実されていると思うのですが、中学校なんか特に私も理工学部ですから、プラス教職の単位を取って認定なので、一応心理学とかいろいろ、まあ当時ですからね、あんまりかもしれませんが、その当時のいろいろな古典的なやつとかは大学で学んで。はい。

片山委員

学校の先生が、みなさんがみなさん、そういうのを履修されて、学校の先生になっているのか、もしくは知識だけでなれる状態で、なっているのかによっても子ども達に接する関係づくりがうまくできるできないってということにも関わってくるのかなって思ったりもするのですが。

中川委員

知識だけとおっしゃると、大半はホントに心理学を学んだと言え、机上の中であつたりとかですから、私たちの時よりかは実習の期間は増えたとは言え、1か月くらいですね。

上甲副部長

僕らは2週間でしたから。

川村委員

先生の意識ですよ。その先生が、私も教員免許を持っているのですが、心理学は興味があつて、その授業は、その授業以外でも、違う学部でも同じような心理学は取りにいたりとか。ほんとに免許取るために、つらつらとする生徒と何か意識を持って、ここは、みたいな。

中川委員

より興味を持って図書館で本を読んだりとか、そうなってくると、川村さんがおっしゃるとおり。

川村委員

結局、同じことは学んでいるけど、その人の意識で、そこは変わってきますね。

新谷部長

これはほんとに、小中の先生、まず小学校と中学校で、課程として求められることが違うと思うのですが、一番大事な関係づくりをどこで学んだっていうので言うと、表のカリキュラムでは出てこないですね。まあ、生徒指導論みたいなのはあるのですが、大学では、僕らのところなんかだと、自分たちで企画運営させる中で、仲間と協力して何かをさせる機会を養成課程の中で作るのか、それこそサークルとかの中でやっているとか。授業では全然話を聞

かないけども、意外と実習いったらバリバリやる子とかもいて。なかなか表のカリキュラムでは出てこないのだと思いますね。で、多分、採用段階でもそこはなかなか見抜きづらいところもあるのかなと。

川村委員

今でもなんかインターンシップ？

上甲副部長

ええ、割とそういう、放課後の勉強を手伝いに行ったりとか、不登校の子のお家に訪問したりとか、そういうのを意識高い学生は教育委員会に登録してね。そういうふうにやったり、ボランティアでやったりとかいうのがあって、そういう人は、なかなか子どものこと好きで、一生懸命やってくれる人が多いですけどね。なかなか大学の授業のカリキュラムの中ではね。僕も最近の大学の事情は分かりませんが、むずかしいかなと。なかなかそういうのはね。現場で子どもと接するのが一番だと思いますけどね。教育実習も長くなっているというのは、そういうのもあるのかなと。実習生来たら大体分かりますよ。ああ、この先生は子どものこと好きかなとか。あんまり熱感しないとか。この人はちょっと教師になってもしんどいやろとか。逆に、なっほしいとかね。まあ、全部は分かりませんが、ある程度は分かります。実習の仕事ぶりを見ていたら。

川村委員

そこで言ってあげることも大事ですよ。だって合わない人が教師になるほど、子どもに返ってくる。

片山委員

そうですね。逆に私が思うのは、学校の先生でもほんとに知識豊富で教え方がうまい先生っていると思います。そういう先生はそういう先生で、子ども達に勉強を教える方向で接してもらってね。例えばそういう勉強以外のところで接する機会のスクールカウンセラーとか、スクールソーシャルワーカーみたいな先生が専属でもいいのかなって思います。みなさんがみなさん、人間、子どもも十人十色で、学校の先生もね、先生だから子どもに接する、関係作りのうまい人でないとなれないっていうのも、ちょっと酷だと思います

新谷部長

そうですね。アメリカの養成段階では、現場に行ってその日のうちに学校に

帰ってきて、振り返りをするっていうのが中心で、1年くらいやったりするので、それは、子どもをどう見るのか、とか、そこで子どもの気持ちをどう解釈するのかっていうトレーニングを積んでいると思うのですが。まあ、それはまたどこかの議題の中で、別の議題の中で、しっかりと話していきたいと思います。

新谷部会長

では、3つの柱に沿って、それぞれの今の段階での答えを少し教えていただきたいのですが、片山さん、いかがでしょうか。

片山委員

はい。まず自己肯定感っていうのは、やはり将来、社会生活を送っていく上では必ず必要になってくるのではないかなと考えております。自己肯定感を高めるための土台作り、土台は何かっていうのは、本人に意識があればいいのですが、やはり周りが高めてあげないとだめだと思っています。それは、先生に押し付けるわけでもなく、親だけでできるものでもなく、とにかく周りの人たちの連携で成り立つのではないかなと思います。3番目の受容と共感で結ばれる人間関係づくりに重要なことは、とにかく接する時間を長く持って、子ども達とですね。とにかく関心を持ってということかなと。親は自分の子どものことを知らない、学校の先生もわれ関せず、っていうような態度ではなくて、とにかく関心を持ってあげるっていうのが重要じゃないかなと思いました。

新谷部会長

ありがとうございます。じゃあ中川先生、いかがでしょうか。

中川委員

1番に関しては、今、片山さんが社会生活とおっしゃいましたが、やっぱり、人間が活動していくための出発点かなというふうに考えます。2番に関しては、人間活動ということであれば、やっぱり人間関係が土台であり、つながり。で、今ずっと出ていた中では、大人と大人の、子どものために教師と保護者であったり、また、教師の中でも先輩教師と若手教師の話やら、校長教頭との話やらも出ておりましたし、っていう大人同士のものもあれば、そこで、最後に新谷先生が言った通り、大人と子ども、子どもが信頼できる大人がいるべきである、それが教師であったり保護者であったりというのでいるんだと。で、時間ということで、片山さんがおっしゃった中でいうと、一番長いこと過ごしているのって、子ども同士での時間もやっぱり長く、特に小学校はね、同じ教室で授業

することが多くて、まあ専科があったりもしますが、私ら中学校ですんで、ぱっと行って、1時間終わって休み時間が終わったら次の先生と交代とかなるんで、子ども同士での関係もやっぱり土台の一つ。全部含めて、やっぱりつながりかなと。で、重要なことで、私はやっぱり教師なので、学校としての重要なことっていうと、仕掛け、と申しますか、クラブ活動入っている子はそうだし、入ってないのであれば、先程も出た通り学校行事であるとか、後程出てくる議題のキャリア教育の中の行事であったりとか、あとは、生徒会活動であったりとか、というような部分にいかにか教師と子どものつながりであったり、子ども同士のつながりができるような仕掛けができるかなというのを、もっともっと進めていかないといけないと自分としては考えました。

新谷部会長

ありがとうございます。川村さんいかがでしょうか。

川村委員

なんか、まとまりきらなかったのですが。とりとめもなくでいいですか。肯定感がなぜ大切かっていうのは、もう肯定感がどこにつながるっていう、さっきから言ってる通りで、前を向いて生きていけるために、学校教育においては、やっぱりキャリア教育にきつとつながってくる。自分ってこんなことができる、世間の役に立っているとか、そういうところにつながるから、そういうのも考えてもやっぱり大切かなと。で、それを高めるための土台っていうのは、私はまずは意識を持つこと。まあそれが土台っていうのかどうかは、目に見えてとか、何かっていうのではないのですが、さっきの話の中でも、先生の生徒の呼び名の形ひとつとっても、それって中学校ではじまるものではなくて、小学校の時なんか、もっと小さい頃、きつと、友達とか、お母さん、近所のおばちゃんたちから名前しか呼ばれていない子が学校に行って、急に苗字で呼ばれる。でもそこで苗字で呼ばれる子もいれば、名前のままずっと呼ばれている子もいるっていう、その子どもの心情っていうかそういうのも考えると、やっぱりそういうところもあるよねって。そういう呼びかけ一つ、言葉かけ一つ、この子はちょっとやっかいだから、とか、この子の奥にあるその親はやっかいだから、ちょっと距離をおく、とか。この子は言っても大丈夫で、ちょっと他の子よりもきつく当たれるとか。そういうことって、やっぱり人間だからあると思うのですが、でも、教師として、その職についているからには、そういうときには、その意識を持って向き合う。で、思春期なんかは、特に自己肯定感というものは、もともと思春期ってすべてを否定する時期だから、自分のことも否定する。だからこそ、そこはそういうものだっていう把握のもとでつきあ

っていかないというようなお話を聞いたことがあるのですが、それって先生にも言えることで、私は、子どもはもう中学3年生で言うことも聞かへんし、悪さもしてね。文句も言われますけど、でも、「川村さんとこの子、見たら必ずあいさつしてくれんねん」とか、先生でも、「言うこと聞きません、提出物だしません。でもやさしい。」とかね。いうこと聞かないやつなんですよ、ほんまに。でもそこで「はい出ました思春期！」ぐらいの、先生も、そういう時期やからもうしゃあないやんって、しゃあないっていうのでもないんですけど、頭ごなしに怒るんじゃないかって、ちょっと余裕を持って、そういう時期だし、って見守るような目とか。そういう意識がまず大事なのかなって。3番の受容と共感で結ばれるっていうのも、2番と3番ってすごく近いのかなって思っていて、教師間でも、保護者間でも、教師と保護者でも、やっぱりつながりを持つこと。それで応援し合えるような。私、自分の子どもの中学校の、校長先生とか、担任の先生にも「先生たちは今、目が死んでる！」って言うんです。何回も、ずっと言っています。それはもう前から。学力向上の時から。子どもはやっぱり学校で長くいるからこそ、先生ってもっと目をキラキラさせながらね、悪さしてもいい、悪さって言ったら言葉悪いですけど、なんかやりたいこともっとやったらええんちゃうのって。そのためには、やっぱり親も先生を応援してあげようっていう思いがないとね。親が家で先生の悪口言ったら、子どもはその先生の言うことを聞かんようになるし、そんな子どもが学校きて、その先生に小生意気なこと言うたら先生だってカチンとくるじゃないですか。悪循環だし、じゃなくて、親も先生を応援してあげる、その代わり先生も、何か困った時にはやっぱり親の方に投げかけて、そこから何か気付いていこうとか、子どもたちにこんなことさせたいとか、何かもっと、目をキラキラさせてほしいんです。親としては。だからそういうのが、実現できるような関係作りっていうか、そういうのが子ども達を見守る目につながるし、そう思うと、きっと、不登校の話も出てきましたけど、私は勉強はできない、学校の授業に入っていると苦しい、だから不登校っていうんじゃないかって、もっと前から、その子の、そうなる環境ってきっとあるんだと思っていて、やっぱりその家庭の問題のことを、知れるのは先生だから、いろんな情報が入る中で、家庭環境とか、いろんな友達関係見ながら、ちょっと声掛け一つ変えてみるとか。昔、小学校でいじめがあったときに、そのいじめのある担任の先生が、休み時間に職員室に戻らずにちょっと問題あるなっていったときは、あえて、教室に残って、子どもらと声掛ける時間を作る。それだけでいじめってなくなったっていうのを何かで読んだことがあって、それってすごく大事で、それは小学校も中学校もやっぱりそういう目とか意識とか、そういうのがつながってくるのじゃないかなって。大事かなって思いました。

すいません。なんかまとまりきらなくて。なんせやんちゃがいなくなったってね。たぶん質が変わってきたのかなって思ったら、それがやっぱり家庭環境とか、表に出さずに陰にこめてしまうって、そこを見抜けるような、親なり先生なりの、意識とか、環境があればいいなと思いました。

新谷部会長

ありがとうございます。上甲先生いかがでしょうか。

上甲副部会長

1番はぼくはもう全ての土台になるものかなと。自己肯定感というのが、自信とか、やる気とか、前に進む推進力、原動力になるのが、自己肯定感かなと。これがない子はやっぱり自己否定して、行動とかも崩れていたりとか、陰にこもると違うかなと思うので、土台じゃないかなと。で、2番については、どうしても教師の視点っていうような感じで、思っちゃうんですけど、もう人間関係づくりに尽きるかなと。やっぱり、話をしっかり聞いてあげて受け止めて、そこから人間関係、信頼関係ができると思うので、それをまずつくるといのがあれかなと。かつては僕も担任をしているときは、クラスはほんとに、一つの家族だというような感じでやっていこな、一年たったら、このクラスでよかったなってみんなが思えるようなクラスにしようってことをいつも常に言っていたのです。まあ、なかなかそうなるのはむずかしかったですけれども、そういうのが一番、肯定感を高める土台かなと思います。で、3番のとは、やっぱりなかなかいろんな先生いろんな人間がいると思うのだけど、ぼくは人間関係づくりで重要なことは真剣に愛情をこめて向き合うことかなと。もうそれにつけるんちゃうかなと。そしてあと、そういう自分を出せる場面を学校の中で意識的にたくさん作ってあげる。授業で難しい子は、さっき中川先生も言っていたように、行事とか、生徒会活動、クラブ活動とか、例えばうちの学校で言ったらプレゼンを結構やらすのですよ。全員がクラスの前に立って、自分で調べてきたことを模造紙を使って、発表しています。まあ、どんな勉強が苦手な子も、前に立って2分くらいしゃべらないとあかんと。結構大事だと思います。クラスによって雰囲気ちょっと違うんですけど、最後まで言えたらバーッと拍手してやるのですね。それってすごくいいなあって、なんかニコッとしているし、ちょっとしたことかもしれないけど、認められたとか、みんなにほめられたとか、というのが、次にいける力になるのかなと。そういうのを今の学校は意識的に作っていく必要があるような気がします。まあ、それをする先生らまた忙しくなっちゃうというね、若干の矛盾はあるんですけども。でもそれは、子どもが元気になったら自分に返ってくるのだから、取組増えたら

エネルギーも時間もいりますけど、結局は最後、いいもんで返ってくるし。逆に言えばそれで楽できる部分も絶対あるだろうから。物理的じゃなくて、心情的っていうか、そういう部分でね。そういうのが、今の学校に求められることなんかなと思ったりします。まあ、昔は総合学習とかそんな時間もなかったですからね。いろんな取組もね。今はたくさんいろんな取組があったりいろんな授業の形式があるけど、それが本当に、今、社会に求められているものなんだろうと、いうふうには思いますけどね。

新谷部会長

ありがとうございます。僕の方で、簡単ですけども。自己肯定感はなぜ大切かっていうので、信頼関係の基本だなと思うのです。自分を肯定できないと相手を肯定できないと思います。これが、信頼関係の基本だなと。で、その土台は何かということで、これは、やっぱり、そうはいつでも相手が表現してくれたり、行動してくれないとそれが分からないので、表現行動があつてそれを見してくれる人がいると。なので、そういう仕掛けが学校の中で必要ですし、物理的に先生と生徒が出会えない、出会える場所がないと見ることも交流することもできないので、いろんな学級活動のところとか、行事っていうところも、大事にしていかなければいけないと思います。で、受容と共感で結ばれる人間関係づくりに重要なことっていうのは、そういう場のところで対話する時間であつたりとか、子どもの様子をきちんと記録するっていうこと、で、やっぱりクラブ活動も含めて、コーチングというか、共感とか受容に基づいた関係づくりっていう関わりであつたりとか。保護者との関係作りも、きちんと、意識的にすると。離れてみてわかるのですが、保護者にとって学校ってやっぱり、門が高い、入りにくいところなので、保護者としては言いたいことの 100 分の 1 も言っていないけれども、先生にとっては 10 も 100 も言われているような。ホントに、保護者会の飲み会と、先生同士の飲み会のどちらも参加するとですね、なかなか、コミュニケーションがうまく取れないなと思うのですが、お互いの理解し合える部分をやっぱり、保護者ともそういう対話の場面っていうのを作るっていうのが大事かなと。で、教師も保護者も、どちらも認められ感っていうのをお互い持てるような関係づくりが必要ですし、やっぱり、今お話し伺って、ちょっと思い出した話があるのですが、2012 年に公開されたミュージックオブハートっていう映画があつて、セントラルパークイーストっていうニューヨーク市の貧困地域の小学校中学校の話なんですけど、かなりしんどい地域で、でもそこが、大学進学率がガーンと上がったんで有名になったんですけど、その学校を作った時に、一番の成果指標として校長が見たのが、この安心して自分を出せるかどうかっていうところで、小学校とか、家庭で、認め

られない子どもたちが、仲間同士でマクベスの劇をするんですね、3時間くらいマクベスの劇をするんですけど、そこで安心して自分たちを表現できるっていうところを見た時に、ああこの学校はうまく言ってるって確信したっていう場面があるのです。やっぱり、安心して自分を出せるっていうクラスになっているかどうかというのを、一つ、学級経営の指標にしてみたいっていうのが大事なかなと思いますし、クラスでは、自分が出せなくても、クラス以外のところに、まずそこに来れるように、まずは保健室でもどこでもいいですけど、で、そこから、クラスに入れるようにと。少なくとも学校っていうのは、安心できる場所なんだ、そういうふうな場所づくりに向けて、協働できていけばいいのじゃないかなっていうふうに思います。で、個人的には川村さんの、これが、一番、具体的でいいのかなと思うのですが、言葉がけで、「何々でも何々」っていうのを一つのキーワードにしてもいいのかなと。一つ注意したら一つほめるのです。ここはだめなんだ、でもここはいいよ。っていうのが、先生相手でも、子ども相手でも、これすぐ使えるなって。これはとても、すぐに、明日から使える言葉がけでいいかなと思います。

川村委員

ちょっと救われます。ガツンガツンガツンガツンもう、うちの子どんだけやねんっていうのが、何か一つほめてくれると、それだけで、まあいいか、いいところもある。みたいな。そしたらちょっと子どもにやさしくなれたりとかね。児童虐待も減るかもしれない。

新谷部会長

ありがとうございます。

事務局（西岡教育総務課長）

ちょっと休憩時間とれなくてももう10分になってしまったので、また、まとめていただきまして、今、みなさんの意見をいただきましたので、新谷先生の方から、全体会の方で報告、委員さん全員で聞かせていただきますので、全員で情報共有していただきたいと思います。よろしく願いいたします。